



TITLE:

巨大陰嚢水瘤を主症状とせるセミノームの1例

AUTHOR(S):

林, 威三雄; 糸井, 壮三

CITATION:

林, 威三雄 ...[et al]. 巨大陰嚢水瘤を主症状とせるセミノームの1例. 泌尿器科紀要 1957, 3(9): 581-583

ISSUE DATE:

1957-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111505>

RIGHT:

巨大陰嚢水瘤を主症状とせるセミノームの1例

大阪大学医学部泌尿器科学教室（主任 楠隆光教授）

助手 林 威 三 雄

副手 糸 井 壮 三

A Case of Seminoma, Hidden in Giant Hydrocele

Isao HAYASHI and Sozo ITOI

From the Department of Urology, Osaka University Medical School

(Director : Prof. Dr. T. Kusunoki)

The tumors of the testis accompanied with the sympathetic hydrocele are not rarely experienced, but the sympathetic hydrocele as huge as to conceal the tumor entirely has hardly been observed.

Recently, we have experienced a case of 65 years old patient with seminoma which was concealed entirely by complicated sympathetic gigantic hydrocele. This hydrocele was 2,500 gm of weight, its content included the fluids of 1,800 cc and the tumor tissue of 500 gm of weight.

緒 言

睪丸腫瘍の場合に交感性陰嚢水瘤を伴う事は少くないが、その程度が極めて高度で、巨大な陰嚢水瘤中に腫瘍睪丸がかくされてしまう事は稀である。私共は最近この稀な所見を呈したセミノームの1例を経験したので、それを報告する。

症 例

患者は65才の男子で、職業は会社員である。家族歴として、父は肺臓癌、母は子宮癌、同胞中1名は脾臓癌で死亡している点より、悪性腫瘍の家系にあると考えられる。既往症としては、26才の時軟性下疳より有痛性横痃を起した以外、生来健康で著患を知らない。嘗て外陰部に外傷を受けた事もない。

現病歴：小児の頃から右鼠径睪丸停滯症（間歇的睪丸停滯症と思われる）があつたが、約1年半程前から右鼠径部より右陰嚢部が全く無痛性に漸次腫脹して、巨大な腫瘍を形成する様になつたので来院した。排尿障害はないが、腫瘍皮膚の一部の擦過創の軽度疼痛と、余りに腫瘍が大きいため、歩行の際少々不便を感じる様になつた。しかし、その他に自覚症状はない。

本年5月8日入院した。

現症：体格稍大、栄養良好で男子乳房肥大症なく、全身所見に異常はない。局所所見は、右鼠径部を中心として縦径 29 cm、横径 23 cm に及ぶ成人頭蓋大以上の腫瘍を認める。腫瘍部の皮下静脈は軽度に怒張し、その一部にズボンとの擦過創を見る。触診するに、全般に弾力性軟で、波動を触れる。圧痛はない。陰茎及び左陰嚢内容は腫瘍のため、左方に押しつけられている。この腫瘍内には、その下極部にやや硬い処はあるが、睪丸その他の腫瘍を外より触知する事は出来なかつた（第1図）

諸検査成績には殆んど全く異常はなかつた。

入院後の経過：5月10日等比重ヌベルカイン1.7 ccの腰椎麻酔の下に、楠教授の執刀にて手術を施行した。先ず腫瘍上に楔形状に擦過創のある皮膚をつけた鼠径部切開をしておいて、腫瘍を周囲より剝離した。剝離は容易であつたが、鼠径部には腹壁筋膜と癒着があり、これを剝離して外鼠径輪に達した。精管を結紮して腫瘍を1つの塊として剔出した。

剔出腫瘍は大き 23×15×13 cm、重量 2,500 gm、菲薄な被嚢内には一般の陰嚢水瘤に典型的な黄色透明の液 1,800 cc を含有していた。又その下極部に 9.5×7.5×6 cm、重量 500 gm の弾力性硬、表面殆んど

平滑な腫瘍があり、その断面は帯黄灰白色髓様で、睪丸及び副睪丸組織は見当らず、所々壊死に陥つた部分と出血巣を見る(第2図)

組織学的所見: 円型乃至類円型、網状の色質を持った明るい核の類円型或は不規則な多角形の細胞が少量の結合組織線維により、大小の集団にわけられ、その間に多量の淋巴球の浸潤が認められる。核の異型性は高度で異常核分裂像も多い。壊死に陥つた部分も少くない。典型的なセミノームの像である(第3図)

以上巨大な陰囊水瘤のみが顕著でそれにかくされていたセミノームである事が分つた。そこで手術所見では周囲に腫瘍が波及した徴候は全く無く、普通の陰囊水瘤と全く異なる所はなかつたが、念の為直ちに Co^{60} 照射を開始し、1日200 γ を毎日、全量4,000 γ 迄現在施行中である。

考按並びに総括

睪丸腫瘍の場合に最も多く見られる特徴は、無痛性の睪丸の腫瘍形成である事は、一様に諸家の認めている処である。最近の主な統計を拾つて見ると、Lowry, Beard, Hewit and Barner (1946) の100例中の90例, Ormond and Best (1948) の40例中の16例, Rusche (1952) の131例中の98例, Culp (1953) の113例中の93例, Thomas and Bischoff (1954) の80例中の52例, Schwartz and Mallis (1954) の100例中の67例, などと大多数の症例が無痛性の睪丸腫瘍形成を主症状としている。この腫瘍形成に軽度の交感性陰囊水瘤を伴うことは、しばしば我々の経験する処であるが、陰囊水瘤が主症状であるほどに大きくなる事は比較的稀である。即ち Rusche の経験例131例のうちには陰囊水瘤と誤診されたほどに著明な陰囊水瘤の併発が6例あつた。Raines and Hurdle (1955) の経験した50例の睪丸腫瘍の中で、著明な陰囊水瘤を併発していたものは5例に過ぎない。その中の1例は入院の2週間前に陰囊水瘤の切除術が施されたものであり、他の1例は7年間も前からあつた無症候性の陰囊水瘤が入院前4カ月に突然大きくなつたものであつた。また Melicow (1955) の経験した125例の睪丸腫瘍(108例の一次性腫瘍及び17例の二次性腫瘍)のうちで、4例が陰囊水瘤の疑いで穿刺された

が、水瘤液の出たものは1例にすぎなかつた。彼等はその他の更に1例にも腫瘍と共に陰囊水瘤の存在を証明し得たが、これら2例の発病からの期間は比較的長く、夫々1.5年及び3.5年であつた。

我国では睪丸腫瘍の多数例についての統計があまりなく、従つて睪丸腫瘍に陰囊水瘤の合併する頻度などについては不明である。またかかる症例として、我々は操信が昭和21年に、巨大な陰囊水瘤と合併せるセミノームの1例を報告しているのを見出し得たにとどまる。操の症例ではその内容液は800 ccであつたが、我々の症例では1,800 ccとその2倍以上に達していた。

Resche の6例及び我々の症例の様に、巨大陰囊水瘤の際には、全く水瘤中に腫瘍睪丸がかくされて、その診断がつきにくい傾向がある。この様な場合には、穿刺して内容を除去して睪丸の正確な触診を企てる必要がある。しかし穿刺を細心の注意を払つて施行し、腫瘍の血行転移を発生しない様にしなければならない。

結 語

65才の男子の右側睪丸に発生したセミノームが交感性に併発した内容1,800 ccに及ぶ巨大陰囊水瘤に全くかくされていた。この様な場合は稀であるので、報告した。

(本論文の要旨は昭和32年6月22日、第130回大阪地方会(泌尿器科)に於て発表した)

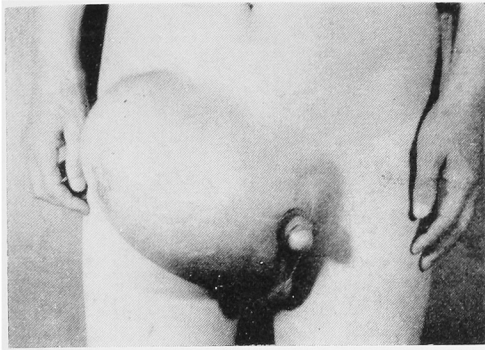
参 考 文 献

- 1) Culp, D. A. : J. Urol., **70** 282, 1953.
- 2) Melicow, M. M. : J. Urol., **73** 547, 1955.
- 3) 操信: 岐阜医報, **1**: 7, 1946.
- 4) Lowry, E., Beard, D. E., Hewit, L. W. and Barner, J. L. : J. Urol., **55** 373, 1946.
- 5) Ormond, J. K. and Best, J. W. : J. Urol., **60** : 272, 1948.
- 6) Raines, S. L. and Hurdle, T. G. : J. Urol., **73** 363, 1955.
- 7) Rusche, C. J. Urol., **68** 340, 1952.
- 8) Schwartz, J. W. and Mallis, N. : J.

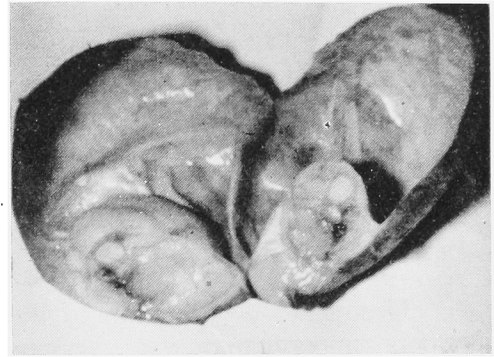
Urol., 72 404, 1954.

9) Thomas, G. J. and Bischoff, A. J. J.

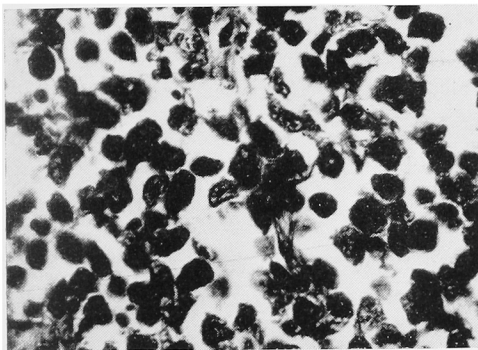
Urol., 72 : 411, 1954.



(第1図) 患者の正面像



(第2図) 陰囊水瘤(内容液1,800cc)の割面
下極部に $9.5 \times 7.5 \times 6$ cm, 重量500gmの腫瘍がある。



(第3図) 腫瘍の組織像(倍率400×)